大阪公立大学共同出版会
OMUP
No.36
NEWSLETTER
ニュースレター
Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目　次

・新春に想う　OMUPの夢は、さらなる「文化力」向上への寄与　足立 泰二 …… 1
・祝・日本都市学会賞（奥井記念賞）受賞　未来へ手渡す HOUSING POLICY（北山啓三著）…… 1
・特別寄稿『鎌倉時代の史書に日本最古の蝶の移動記録』　石井 実 …… 2
・自著を語る（23）　ほっとかない郊外　ニュータウンを次世代につなぐ　泉北ほっとかない郊外編集委員会 …… 3
・自著を語る（24）　生物環境物理学ことはじめ　高見 晋一 …… 4
・新刊書の紹介 …… 4
・大阪公立大学共同出版会事務局より …… 4
・編集後記 …… 4

新春に想う

OMUP の夢は、さらなる「文化力」向上への寄与

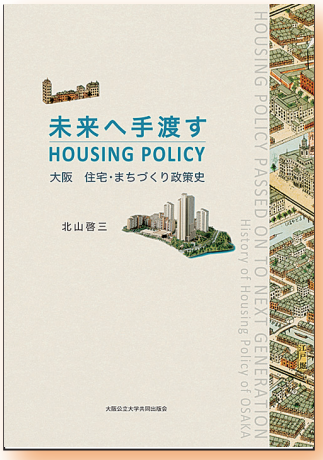
理事長　足立　泰二

「文化力」という表現がある。私の記憶では、大阪万博の終わった頃だから、今から40年以上も前に、梅棹忠夫らの関西21世紀委員会で「文化力」を鼓舞したように思う。最近では、文部科学白書にまで使われるまでになってしまった。定義も無ければ、明白な尺度もないのに。そもそもヒトは数値に弱い。研究業績や大学ランキングまで数値化、序列化をして見せる。画一的なものの考え方で一方的に評価する愚かさが、政治家や行政が言う「文化力」に及ぶべきではないと思うのは、私一人ではないはずである。

さて、最近では「サブカルチャー」の言葉も一人歩きして、それに呼応するように「メインカルチャー」が、正統的・伝統的なのに対して、質的に劣る文化の存在を差別化する傾向さえ窺える。経済性優先で動く社会には「文化力」や、「文化性」はなじまない。上意下達・中央集権的ではなく、多様性の中からのボトムアップ型の様態こそ「文化力」の評価に値するのではなかろうか。

創立後、やがて数年で20年を迎えようとする我がOMUPも、全方位の学術・啓蒙出版を中心に関西、否、日本の「文化力」向上に寄与する気概を持って進みたいものである。

祝・日本都市学会賞（奥井記念賞）受賞



北山啓三 著『未来へ手渡す HOUSING POLICY』

B5 判、並製本、230 頁、2,500 円＋税、ISBN978-4-907209-61-2

読書

『未来へ手渡す HOUSING POLICY』
大阪　住宅・まちづくり政策史

著者と1時間

大阪市の住宅・まちづくり政策通史

元大阪市副市長
勝水化学工業顧問・
ライフラインカンパニー顧問
きたやまこ　けいぞう
北山　啓三さん

「副市長の退職（2011年12月）を契機に、大阪市の住宅・まちづくり政策の歴史を通史的にまとめておく必要を感じました。各時代において、どのような背景と考え方で、それぞれの政策が展開されてきたのか可能な限りの資料を掲載し、またビジュアルに残しておきたいと」

著者の北山啓三氏は、京大工学部建築学科を卒業、同大学院修了後、1973年大阪市に入庁。住宅政策課長、都市整備局長、大阪市住まい公社理事長、大阪市副市長などを歴任した。「約39年間地方行政を担当しましたが、33年間が住宅行政で、そのうち26年間が企画・政策部門という（は特筆かも知れません）」と自身を振り返る。

「大阪の住宅・まちづくりの通史は、江戸時代から語られなければならない。近世の大阪には、優れた町家や長屋が立ち並び、かつモジュールが統一されていた。大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）で実物復元を見ることができる。

「建物の寸法が畳割りで統一され、畳や建具の中古品が流通し、借家比率が8割を超えていました。それも畳や室内の建具は借主が用意する構資です。町並みのコントロールや種の維持管理も町人自治で行われた変先進的でした」

戦前の住宅政策では、御堂筋拡幅など都市大改造で知られる関一市長の第競分析は欠かせなかった。

「調べを進めれば進めるほど、日本の住宅政策の遅延だと実感しました。当時から住宅問題と都市計画は一体との強い信念の持ち主だった」。関氏は、都市計画法や市街地建築物法の成立に重要な役割を果たし、住宅政策の分野でも市長に就任する直前の出役当時には『住宅問題と都市計画』という大著を執筆している。

戦後復興期において「先人の方々は大変な努力で公共住宅の建設に取り組まれ、その おかげで今日も、大阪市の公共住宅比率は全国的にもトップ水準にあります」。72年度、市長の諮問機関として大阪市住宅審議会が設置された。また、74年度には住宅政策の企画立案を行う企画室が建築局に新設され、著者の住宅・まちづくり政策のスタートともなる。

以降、人口回復のための政策、都市型集合住宅開発、老朽鉄筋市営住宅の建て替え、密集市街地整備、地域住・歴史雰囲気生かした各地区でのＨＯＰＥゾーン事業をはじめ、多くの人が関わる市立住まい情報センター（99年開設）・住まいのミュージアム（2001年開設）などに引き継がれている。

貴重な資料含め近代から今後まで

戦前の住宅政策の前期、大阪市の住宅・まちづくり政策の実績を考慮しての戦後、大阪市の住宅・まちづくり政策の展開、中・長期は「明治を含む「戦前の住宅政策」、第2章「戦後復興期の住宅政策（敗戦～昭和40年代）」、第3章「入口回復期における住宅・まちづくり政策（昭和50年代）」、第4章「大阪市HOPE計画と都市住宅の改革（昭和60年代）」、第5章「住宅・まちづくりの展望（21世紀）」の構成。各時代ごとに、各分野の大きな流れを概観し、各時代ごとに、豊富な写真や図版の使い方、大パノラマ図版を加えたりも興味深い。

未来へ手渡す HOUSING POLICY
大阪　住宅・まちづくり政策史
北山啓三
大阪公立大学共同出版会
2,500円＋税

おすすめの一冊

建設通信新聞 2017 年 10 月 25 日掲載

特別寄稿『鎌倉時代の史書に日本最古の蝶の移動記録』

大阪府立大学理事・副学長
石井　実

日本は世界でも珍しいほど昆虫の愛好家やアマチュア研究者の多い国である。例えば、一昨年亡くなった鳩山邦夫元衆議院議員は、政治家としての本業の傍らチョウの採集や飼育に情熱を注ぎ、『チョウを飼う日々』（講談社，1996年）という著書まで著されている。これまで鳩山氏のようなノンプロの研究者の活躍により日本の昆虫相が解明され、分布や生活史なども明らかになってきた。私も一昨年、多くのアマチュア研究者の協力を得て、他の研究者と地球温暖化などによる日本産チョウ類の分布の動向を整理して『チョウの分布拡大』（井上・石井編，北隆館，2016）を出版した。

日本人の昆虫への関心はいまに始まったことではないようだ。『堤中納言物語』に登場する「蟲愛ずる姫君」のような虫好きがそうそういたわけではないにせよ、平安時代には、既に蛍や虫の音をめでる文化があったことを『枕草子』などからうかがい知ることができる。松虫や鈴虫の虫篭での飼育は『源氏物語』に出てくるので、当時は貴族の間で流行していたのかもしれない。鳴く虫の鑑賞は、その後庶民にも広まり、江戸時代には街中で虫売りが商いをしていたという。

ところで、鎌倉時代の史書『吾妻鏡』に「宝治二年九月小七日、辛亥、黄蝶飛行す（後略）」という記述がある。内容を要約すると、宝治二年（1248年）の９月７日と19日に鎌倉付近を幅300mにおよぶ「黄蝶」の群れが通過したというものである。これはおそらく、日本最古のチョウの移動を記録したものと言えそうだが、実はこの「黄蝶」が何なのかがわからない。

鎌倉付近で秋に普通に見られる黄色いチョウとしては、キタキチョウという中型の種が考えられるものの、これまでに大群をなして移動したという報告はない。では何か。思い当たるのが、私が大学院時代から調査しているイチモンジセセリという小型のチョウである。

このチョウは稲作害虫で、イネの葉を綴って巣を造り食害する。関東では８～10月に成虫が南西方向に向かって移動することが知られている。三重大学の故山下善平教授は、このチョウの移動記録を整理し、確実な記録として残る最大の群れは1952年９月２日に神奈川県松田を通過したもので、長さ12km、幅５km、厚さ9.5m、推定約18億個体が南へ向かって移動していったとしている。

実は大阪でも、昔は市内をこのチョウの大群が時々通過したようで、宝塚昆虫館の館長だった故戸澤信義氏は、1930年８月21日、群れが建物の窓から飛び込み、あるいは街行く人や車と衝突して大騒ぎになったと報告している。また、大阪市立自然史博物館の学芸員だった故日浦勇氏は、『海を渡る蝶』（蒼樹書房，1973年）の中で、1969年８月27～28日に大和葛城山の山頂を奈良側から大阪側に向かって飛び越えるこのチョウの大群の様子を記述している。チョウの群れは、ピーク時には視野の範囲で３千～４千個体を数え、推定移動個体数は少なく見積もっても３百万個体以上だったという。

近年では、水田の減少などでこのようなイチモンジセセリの大移動は見ることができなくなった。しかし、８月の下旬から９月に大和葛城山に登ると、１分間に十個体前後のこのチョウの移動飛翔を見ることができる。私たちの調査結果は『蝶の自然史』（大崎編，北海道大学図書刊行会，2000年）にまとめたので、このチョウの移動の謎解きはそちらに譲るが、『吾妻鏡』の「黄蝶」がイチモンジセセリであることに皆さんもご賛同いただけるだろうか。実は、ひとつだけ問題がある。それは、イチモンジセセリは黄色ではなく、茶色だということである。

私は大阪公立大学共同出版会の発足当初からの会員ではあるが、これまでたいした貢献ができず、申し訳なく思っている。18年ほど前、当時同じ学科におられた足立泰二先生に誘われてこの会の設立準備に関わり、大阪女子大学（当時）の小股憲明先生や大阪府立看護大学（当時）の高辻功一先生たちと打合せをしていた頃がなつかしい。その後、私は旧大阪府立大学の副学長を拝命し、各大学の副学長になられた小股先生、高辻先生と３大学の統合と法人化に関わることになった。現在、私は当初から本出版会に参画している大阪市立大学との統合に関わっており、何かの因縁を感じる。法人化後10年以上を経過し、益々発展する本出版会の今後の活躍に期待している。

自著を語る（23）

ニュータウンを次世代につなぐ

ほっとかない郊外

泉北ほっとかない郊外編集委員会 著

四六判、並製本、274頁
1,900円＋税
ISBN978-4-907209-76-6　C0036

郊外をほっとかないとどうなるのか？

大阪にある泉北ニュータウンでの「ほっとかない」ための実践を記録した書籍が、本書『ほっとかない郊外』です。

取り組みの現場である泉北ニュータウンは、1965年に開発が始まり、大阪都心部に通勤できる緑豊かな郊外住宅地として人気を呼びました。ピーク時の人口は16万人を超えました。しかし、まち開きから約半世紀を経た現在は、高齢化が進み、総住戸のほぼ半分を占める府営住宅の空室率は約15%に及んでいます。人口減少や少子高齢化、空き家の増加という課題は、泉北ニュータウンに限らずに、高度経済成長期に開発された日本全国の郊外住宅地が共通して抱える課題だといえます。このような状況をそのままにしておくのではなく、ほっとかないことで、ニュータウンの状況を好転させることができるのではないか、そんな想いを持った人々がそれぞれに小さな取り組みをはじめました。

ほっとかない郊外としての具体的な内容は、「泉北ほっとけないネットワーク」と「泉北ニュータウン住宅リノベーション協議会」での取り組みが中心となっています。2010年に自治会を軸とする住人と地域内外の民間組織や大学、行政が協議会を構成し、「泉北ほっとけないネットワーク」と名付けました。このネットワークの中で、地域の中に空き家や空室を活用した複数拠点を整備し、その後はその拠点をつかって活動を広げています。最初の取り組みは泉北ニュータウン内の槇塚台というエリアで進められました。その後、2015年に戸建て空き家のリノベーションを促進するための「泉北ニュータウン住宅リノベーション協議会」が立ち上がりました。寝に帰るまちだったニュータウンに職住一体居住による働き暮らすライフスタイルを提案、実践しようという試みです。

ニュータウンに関わる人たちの個別の想いや行動を書籍で伝えたい。そんな野望があったため、本文は当事者がそれぞれの活動を語るという会話形式のような体裁になっています。あとがきにも書きましたが、この本に登場している人物は61名、関わった学生は78名となっています。本書に関わる取り組みがはじまったのは2010年ということになっています。それから7年ほど泉北ニュータウンに通って感じたことは、これらの活動には1人のキーパーソンがいるわけではなく、各人の立場から重要な役割を果たしている人たちがいて、その人たちがつながることで取り組みが進んでいるということと、その結果として取り組みに自由さと面白さと力強さ生まれていることでした。その中で、強く印象に残っていることは、いろんなことが現場で起こっていて、それを共有しながら次に進めて行くことができる秘訣が、オープンな会議の場にあるということです。

本書の構想が持ち上がったのは4年ほど前になります。編集に建築編集ユニットのぽむ企画のお二人を迎え、会議を重ねました。会議はとても面白く、改めて活動を振り返る機会にもなりました。この書籍の完成には9人の編集委員が関わっており、ここでもそれぞれの想いが反映されています。本書を手にとって、小さな想いと行動の集積を感じていただけましたら、とてもうれしいです。2018年の早春の頃には、この取り組みの現場のひとつである槇塚台自治会館と槇塚台レストランにて出版記念会を行う予定です。久しぶりの人たちと会えるのを楽しみにしています。そして、そこでの出会いから、また違う取り組みがはじまるかもしれません。（文責　小池志保子）

自著を語る（24）

生物環境物理学ことはじめ

A4判、リング製本、200頁
1,500円＋税
ISBN978-4-907209-75-9

高見 晋一 著

本書の最大の特長は、その柔軟な「越境性」(鈴木哲也・高瀬桃子:2015『学術書を書く』京大学術出版会)にある。蒸発とイネの種子生産過程がともに「ポンプモデル」で取り扱えることを示したのはその一例である。材料は全く違っていても、同じ道具を使って、同じ方法で、それぞれの食材に応じた美味しい料理ができるのだ。このような道具立てと運用法をここでは「科学リテラシー」とよぶことにする。それは、揺るぎない科学的真理を見極める力に繋がる。

「あとがき」に記したように、「専門性のタコツボ」への挑戦が本書を執筆した動機の一つであった。自分の専門領域については、部外者に口を出させない、その代わり、自分も相手の領域には口を出さないといった風潮への挑戦である。こういった私の思いは、執筆中に起きた二つの事件によって一層強まった。2011年の原発事故、それに2014年のSTAP細胞事件である。

分断の壁を越えて

これらの事件に共通するのは、当事者、関係者に科学リテラシーの重要性がほとんど認識されていないことである。生命科学の研究者としては、たとえば、ピペットの操作技術も必要だ。しかし、科学リテラシーの基盤を欠けば、その人は「人力ピペット操作装置」に過ぎない。「ピペド」(榎木英介:2014『嘘と絶望の生命科学』.文藝春秋）の境遇に陥るのは時間の問題だ。そのような犠牲者を生み出した教員、指導者の責任は重い。

原発事故では、専門家への信頼が大きく揺らいだ。権威が失墜したといっても過言ではない。しかし、責任は、私達、市民にもある。専門家に丸投げし、このような事態に至るのを許してきたからだ。科学技術時代に生きる私達は、素人は素人なりに、それなりの科学リテラシーを養わなければならない。本書がその一助となることを願う。

新刊書の紹介

①驚きの因果律あるいは心理療法のディストラクション
中井 孝章 著　四六判、上製本、186頁、1,800円＋税
ISBN978-4-907209-68-1　C3011

②双方向授業が拓く日本の教育 アクティブ・ラーニングへの期待
畑田 耕一 編著　四六判、並製本、316頁、2,200円＋税
ISBN978-4-907209-69-8　C0037

③日本ファイバー興亡史
ー荒井溪吉と繊維で読み解く技術・経済の歴史ー
井上 尚之 著　A5判、並製本、128頁、1,890円＋税
ISBN978-4-907209-65-0　C1058

④地域活性化のための観光みやげマーケティング
ー熊本のケーススタディーー
荒木長照・辻本法子・田口順等・朝田康禎　共著
四六判、並製本、250頁、1,800円+税　ISBN978-4-907209-64-3　C3063

①

②

③

④

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加によって成り立っているＮＰＯ法人です。本会は、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、次のような事業を行っています。

(1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
(2) 会員の学術図書の刊行頒布
(3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
(4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

参加を希望される方は、下記事務局へお問い合わせください。

〒599-8531　大阪府堺市中区学園町1-1
大阪府立大学中百舌鳥キャンパス内
ＮＰＯ法人大阪公立大学共同出版会（ＯＭＵＰ）事務局
電話：072-251-6533　ファクシミリ：072-254-9539
e-mail : omup@hs.osakafu-u.ac.jp　URL : http://www.omup.jp/
入会金：一口一万円（終身会費）
振込先：三菱東京ＵＦＪ銀行　中もず支店　普通3976510

編　集　後　記

明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になり、有難うございました。皆さんのお役に立てるよう、日々努力してまいる所存です。今年も相変わらずご愛顧の程お願い申し上げます。（文責：児玉）